●マルモ・ライティング・ニュース

MARUMO LIGHTING NEWS

光の世界を極める……

●松竹・サンシャイン劇場公演『ロミオとジュリエット』

3

1986—3★VOL.—59

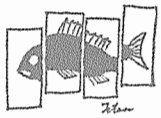
続・高校演劇での
照明プランの考え方
●薄井澄夫

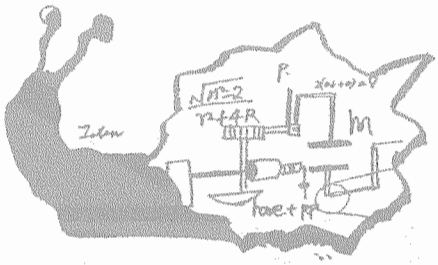
初心者のための
オペレーター入門
●中山功

活躍する照明家にきく
●山本良則

光のエッセイ
●辻由美子
●小林裕

続・高校演劇での照明プランの考え方





薄井澄夫
(J・S・C)

前号（Vol38）に掲載されました山内晴雄氏の「高校演劇での照明プランの考え方」の続篇として、今回は実際の照明プランの作り方について具体的に述べてみたいと思います。尚、これは山内晴雄氏の監修で制作されました『ビデオで見る演劇の基本と実際』の「舞台照明篇」を基に構成したものです。

舞台照明の要素について

演劇の照明は背景を美しく見せるだけでは、その役割を果たしているとはいえません。何といっても、舞台照明の第一の目的は、舞台で演じられている劇を観客に見せるということです。そして、劇の内容を正しく観客に伝える助けをすることです。

この役目を果たすため、舞台照明には大きくいって次の三つの要素があります。

1．角度
2．色彩
3．明るさ

角度

はじめに角度＝光のあて方について、どういう光のあて方をしたら、よりよく観客に見せることができるか、それについて考えてみましょう。

舞台照明はいろいろな角度からの光の組立てによって成り立っているわけですが、これを劇場の照明設備の面から見てみましょう。（図１）

色彩

舞台照明では色も大きな役割を果たします。

自然の情景をリアルに表現するための色、情緒などの心理的な面を補助するための色など、さまざまな色の光を出すために舞台照明ではカラーフィルターを使います。このカラーフィルターには色によって番号がつけられており、No.や#を用いて表記されますが、ここではNo.を使って、舞台でよく使用される色を紹介しましょう。

これらはあくまでも使い方の参考として紹介したものですから、皆さんは自由な発想で選んでください。

色彩の使用例

No.16、17（ピンク）朝日、はなやかさ、恋心、あこがれ、花
No.22、24（赤）炎、激しさ、血、太陽
No.31、33（濃いアンバー）夕陽、晩秋
No.34（アンバー）ランプ、夕陽
No.35（アンバー）行灯、ローソクの光
No.37、38（赤味のあるアンバー）夕陽の光として、朝焼け
No.44、46（黄色）はなやかさ、日光
No.45（ストロー）電灯、午後の日光、秋
No.55、59（グリーン）木陰、森の中、田園、若葉
No.64（ライトブルー）昼の室内、屋外、雪、抽象的空間、涼しさ
No.67（ライトブルー）夜明け、朝などの光に、雪
No.65、76、78（ブルー）明るい空、月の光、夜の雪、影、寒さ
No.72（ダークブルー）夜の空などに使う
No.84、85（ヴァイオレット）激しさ、不安
No.87、88（パープル）幻想的ムード、甘美

このような色を選択するために、カラーフィルターのサンプルがあります。これを光に透かしてみて、何番の色を使おうか考えるわけですが、その時、屋外の自然光や蛍光灯を通して見ないでください。舞台照明の光源は殆んど白熱電灯ですから、実際に照明器具に入れた時、予定したのと違った色が出て困ることがあるからです。

明るさ

角度と色の決まったライトを今度は明るさを調節して見やすい照明をつくるわけですが、明るさの調節については、作品例の中で見ていくことにします。

基本的な照明器具

次に、舞台に対して光を出すための照明器具にはどんなものがあるのかを調べてみましょう。

①スポットライト

スポットライトは電球から出る光をコンデンサーレンズで集めて、ある一定の広さに強い光を投げかけることができる照明器具です。スポットライトにはいくつかの種類がありますが、ここでは平凸レンズスポットライトとフレネルレンズスポットライトの二種類について説明しましょう。

●平凸レンズスポットライト
虫メガネのレンズによく似た片面平、片面凸面という平凸レンズを使ったスポットライトです。照射された光は輪郭もはっきりし、遠い距離からでも充分に対象物に当てることができます。

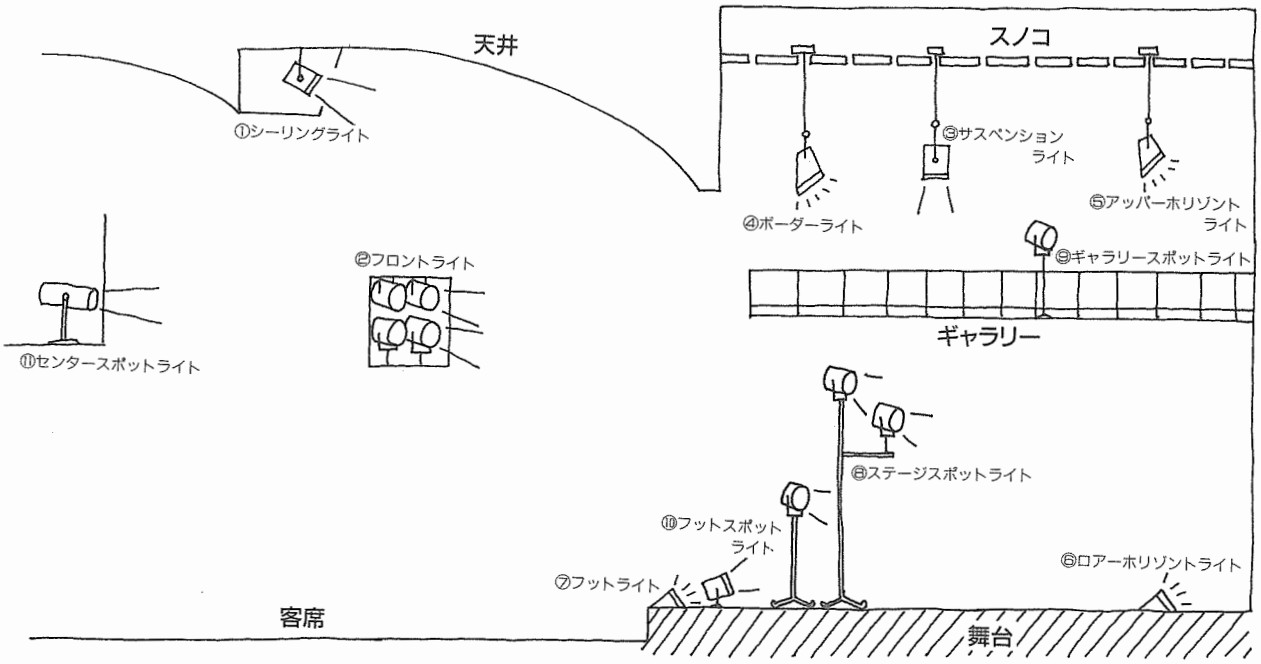
●フレネルレンズスポットライト
レンズ面に同心円の渦巻状の溝があり、外の面にも細かい凹凸があるフレネルレンズを使ったスポットライトで、柔らかく、輪郭のはっきりしないソフトな光を出すことができます。

②フラッドライト

フラッドライトとスポットライトとの大きな違いは、フラッドライトにはレンズがないことです。ただ、電球の後ろに反射板があって、それで点灯された電球の光をスポットライトと違って広い角度で、柔らかい感じの光をステージに投げかけます。

狭いステージの時には、サスペンションスポットで地明りをつくるよりも、フラッドライトを使ったサスペンションフラッドのような器具を吊って地明りをつくる方がよい場合があります。

図1　劇場の配置器具名称



配置器具名称

①シーリングライト(Ceil)
客席上部より照射されるライト。観客にとっては、この前方からの光が最も演技者の表情を見やすくしてくれる。
②フロントライト(Fr.SP)
客席の両側面より舞台に光をあてる。演技者を見せるとともに光の方向性も表現する。
③サスペンションライト(Sus)
舞台上部より演技面を明るくするとともに、舞台装置の立体感を出すために使う。
④ボーダーライト(B)
舞台上部に樋状に配置する。舞台（装置）を全体的に照らすのに使う。

⑤アッパーホリゾントライト(U.H)
ホリゾント近くに配置し、天空を表現する。
⑥ロアーホリゾントライト(L.H)
地平線もしくは水平線を表現する。アッパーホリゾントライトより少し明るめの色で表現した方が、写実的で安定感もある。
⑦フットライト(F)
舞台前面下部に樋状に配置する。光の方向性の点で現実的でないが、演技者の顔や衣裳を明るくするのに便利なので、歌舞伎や日舞などでは多く使用される。

⑧ステージスポットライト(S.S)
⑨ギャラリースポットライト(Gall)
舞台側面より光の方向性、および演技者や装置の立体感をだすために使用する。ギャラリーはステージスポットライトより高く位置する。
⑩フットスポットライト
床面の低い位置から照射する場合に設置する。
⑪センタースポットライト
客席天井後方、あるいは客席後方に設置する。使用する目的は演技者を強調する場合と、暗い舞台でのカバー（演技をよく見せる）する場合とに大別される。

news

来春2月、『ASPECT IN STAGE 2001』開催

●(社)日本舞台照明家協会と全国ホール協会の企画による『ASPECT IN STAGE 2001』が来春の2月19、20日の両日、世田谷区砧の東宝スタジオで開催されます。このイベントは舞台、照明、音響など各分野の現代最先端にあるハイテク技術を駆使し、21世紀を創造するファンタジックなパフォーマンスを展開しようというものです。MARUMOの技術も協賛出品としてこのイベントに参加します。
入場料は一般2,000円、学生1,500円。

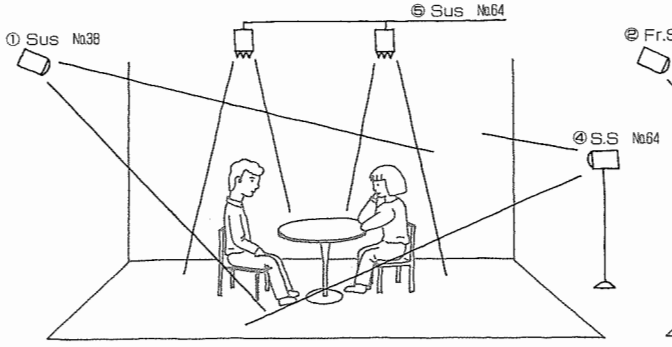
お問い合わせは、ライティングBIG1内『ASPECT IN STAGE 2001』実行委員会事務局 TEL 03-306-4117まで

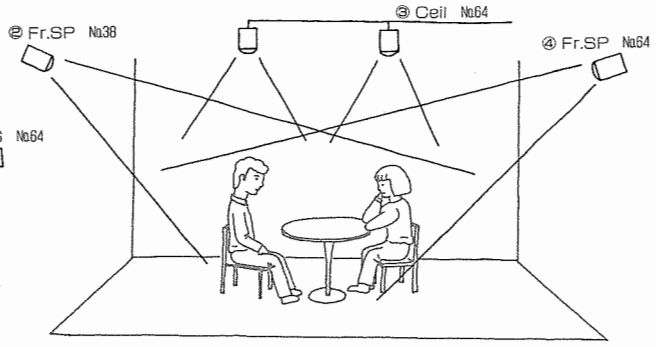
これまで学んだことを参考にしながら、実際に簡単な照明プランを考えてみましょう。

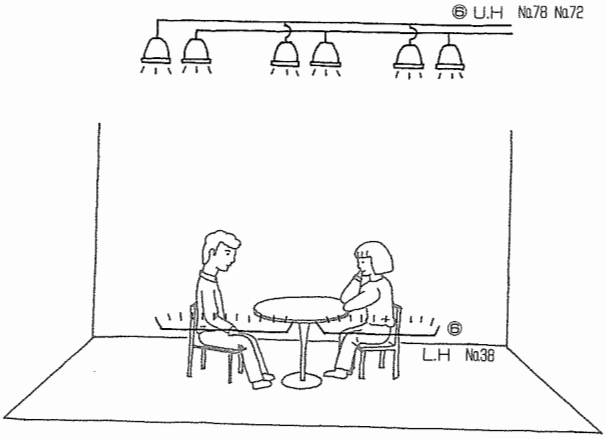
作例①夕方の屋外

もう間もなく陽が沈むころの夕方ですので、夕陽の角度はかなり低い位置にあるという設定です。
①キィーライトとして、夕陽をNo.38のカラーフィルターを入れた下手からのサスペンションライトで出します。しかし、これだけでは光の方向が真横すぎて観客には舞台の演技がよく見えません。
②そこでサスペンションライトに使ったものと同じ色を、下手のフロントスポットライトに入れて明りを出します。これで多少は見やすくなりますが、それでも実際に芝居を見せる明りとはとてもいえません。
③演技を見やすくするために、前からの明りとして正面のシーリングライトにNo.64を入れて明りを出します。この明りはあまり強すぎると折角つくった夕陽という効果をなくしてしまい、陰影がとんでしまいます。夕陽の効果を壊さず、しかも観客に舞台を見せるための明るさにするために、実際に舞台を見ながら光量を調整してください。
④大分、演技が見やすくなりましたが、明りの方向が下手からと前からの二方向だけですから、上手側の客席から舞台を見ている観客にはまだ見づらいようです。また、演技者が上手を向いた演技をする時も見にくくなります。そこで、上手のフロントスポットライトとステージスポットライトに同じNo.64を入れて明りを出してみます。この時気をつけて欲しいことは、ステージスポットライトの高さを充分にとって、演技者同士が影にならないようにすることです。
⑤これで最小限、観客に演技を見せる明りはできたようです。しかし、これだけではちょっと立体感にとぼしいように思われます。そこで私たちが地明りサスと呼ぶトップサス、舞台上部に吊ったサスペンションスポットライトに同じNo.64を入れて明りを出してみることにします。これで演技者の肩口あたりにも明りが当るため身体の線や動きなどが強調され、立体感もでてきました。
⑥さらに、ここまでの明りでは屋外なのか室内なのかわかりません。ここでは屋外という設定ですのでホリゾントを染めて、夕方の空を表現してみましょう。日の沈み際ということなので、ロアーホリゾントライトにNo.38を入れて明りを出します。これだけではホリゾント全体がアンバーになってしまうので、アッパーホリゾントライトにNo.72、No.78を入れて明りを出してみます。この時、No.78はフルで出しますと、白っぽくなってしまうので、少し光量をおとして出したほうがいいでしょう。
これで大体夕方の屋外の明りになりました。

※作例プランは、屋外、室内とも〝丸いテーブルと椅子に座った二人の人物〟という同じシチュエーションを基に考えてみました。室内の場合は、このシチュエーションに電灯を加えました。

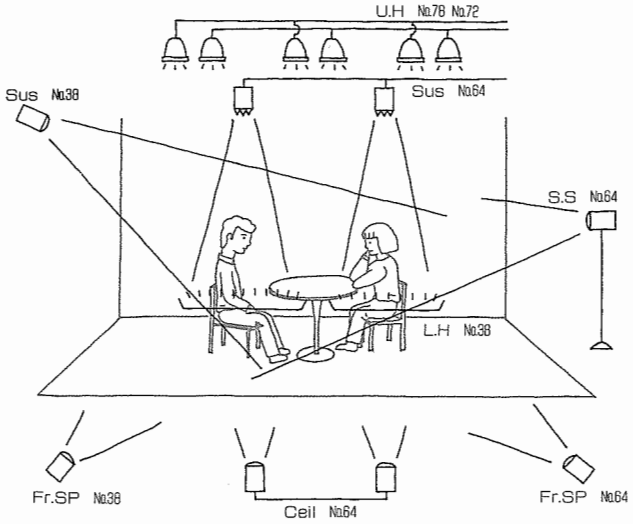






全体図

全体図ではシーリングライトとフロントライトの位置を下に移してあります。



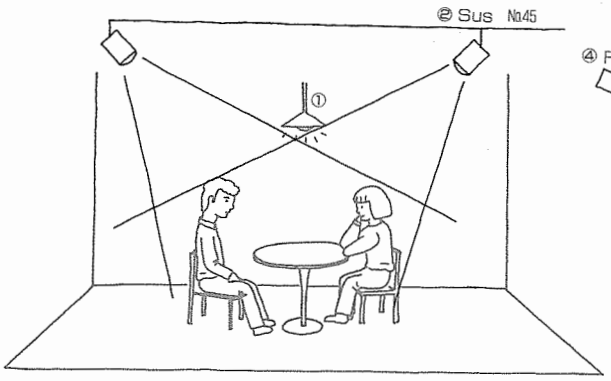
作例②夜の室内で電灯のついた状態

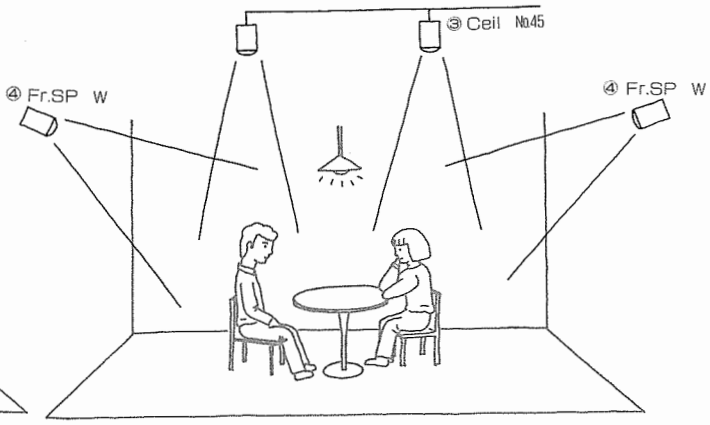
①実際に吊った電灯を点灯します。しかし、観客には電灯の明りばかりが見えて、登場人物はうす暗くよく見えません。そこで、芝居を成立させるため、補助光線をいろいろな角度から加えていくことにします。
②電灯は上にあるわけですから、上からの光でそれも斜めに広がる光を補助する意味で、サスペンションライト二台を少し広げて、No.45のカラーフィルターを入れて吊ってみました。
③これだけでは観客からはちょっと見にくいので、シーリングライトに同じ色を入れて明りを出してみます。この場合、前からの光がくるというのは、電灯がついている状態に対してウソになるので、芝居を見るのに邪魔にならない程度に光量をおとして出してください。明りの方向としては上からの光が強くきているほうが、電灯がついている状態の明りらしくなるわけです。
④まだこれだけでも客席の端の方の観客にはちょっと見にくいかもしれません。フロントライトをつけてみましょう。この場合、カラーフィルターを入れないで明りを出してみます。なぜかというと、このフロントライトからの補助光線は電灯がついている室内の明りの状態に対して、一番ウソという感じがするのであまり強く出したくありません。なるべく光量をおさえてかすかな補助光線として使います。スポットライトの光の色というのは電圧を下げていくとやや赤みを帯びてきますから、カラーフィルターを入れずにその色をそのまま生かして使いたいためです。

これで大体夜の室内という感じになったとおもいます。

さらに窓からの月光の差し込みなどを出してみることもあります。

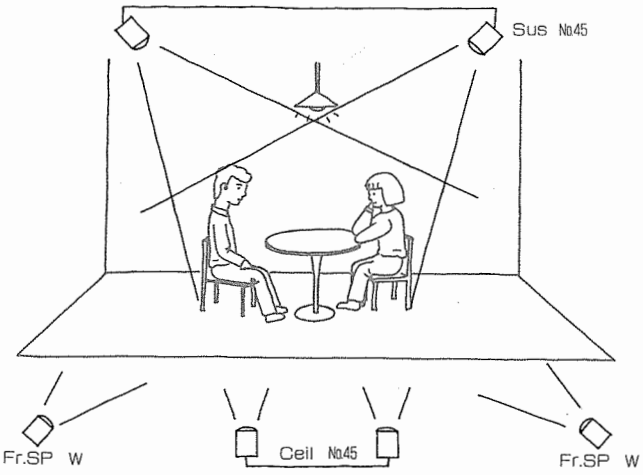
この室内の照明で気をつけたいのは、実際に吊るしてある電灯の明るさです。家庭では普通100Vで点灯させていますが、この明るさが強すぎると、観客にとって目潰しになって、電灯の光ばかりが目に入り、その下での演技をする役者が見にくいということがあって、電灯の光ばかりが目に入り、その下での演技をする役者が見にくいということがあります。電灯の明るさには充分気をつけて、じゃまにならず、なお電灯がついているという状態がわかるような明るさに調節してください。





全体図

全体図ではシーリングライトとフロントライトの位置を下に移してあります。



※このページでは、照明に関する質問や実際の明りづくりで直面した問題などについてお答えします。また、自作の照明プランへのわかりやすいアドバイスもおこないます。どしどし編集部までお寄せ下さい。

『ビデオで見る演劇の基本と実際』好評発売中

視覚的にわかりやすく、演劇について学ぶために企画・製作された『ビデオで見る演劇の基本と実際』が好評を博しています。舞台照明篇は本文にもありますように山内晴雄氏と薄井澄夫氏が担当されています。

第1巻　舞台照明篇　発声訓練篇
第2巻　音響効果篇　メークアップ篇
第3巻　舞台美術篇　肉体訓練篇

内容は上記のように1巻に2篇が収録されており、それぞれ1篇の収録時間は約40分。解説(図解)パンフレット付きで、定価は各巻9,000円(送料別途)

●問い合せ先
㈱ジャパン・ステージ・コンサルタント
〒104　東京都中央区銀座2-14-5　三光ビル301号
TEL 03-545-9485

初心者のためのオペレーター入門 4

仕込み作業とサス合わせ

中山功（S・L・S）

劇場入り

大急ぎで進めてきましたが、いよいよ劇場入りです。

「仕込み」作業をおこない、「舞台稽古」を迎えることになります。稽古場での多少漠然とした準備に比べれば、より具体的な作業が中心になります。

実際の現場での「仕込み」や「舞台稽古」に与えられている時間は必ずしも充分――必要にして充分の意――だとはいえません。かなりの無理がプロ意識をくすぐりながら、まかり通っているのが実情です。作業時間が短いという問題は、専門職としての作業の合理化や技術の向上といったことである程度解消される部分もあるにはあるのですが、芝居作りの総体としてみれば熟練や合理化だけでは解消されない問題が含まれているように思われます。照明だけの立場でみれば、何よりスムーズに作業および準備が進められることが求められます。そのためには、これからおこなう作業の内容をいかに理解しているかということが重要になってきます。

稽古場での準備や打ち合わせがここにきて大切なものとしてクローズアップされてくるわけです。

専門技術者に求められるさまざまな要求の中で、作業の「確実さ」「早さ」は大きな課題であることはいうまでもありません。それが「仕込み」の段階でかなり試されることになります。

劇場で生きる稽古場での準備

学校演劇などで始めて照明に携わる人たちに、「確実さ」「早さ」を求めるのはかなり無理な注文ということになりますが、それでも稽古場での準備が充分であれば、現場であまりとまどうこともなく、作業を進められると思います。

学校の講堂や体育館などで、自分たちで「仕込み」をしなければならないような場合を考えても、他のクラブとの使用時間の調整がつきさえすれば時間はある程度たっぷり取ることができると思いますので、「早さ」よりも「確実さ」を優先させて、何度でもやり直して作業を進めることができます。そういった利点は充分いかして欲しいと思います。また、市民会館や文化ホールといった公共施設を使用する場合であっても、自分たちの準備が、打ち合わせも含めて充分であれば作業はかなりスムーズに進められると思います。

いうまでもありませんが、ここでいう準備の中身は照明についての具体的な事柄ですから、芝居の中身が判るというだけではなく、照明プランの意図をより具体的に捉えておくということが重要になってきます。プランの意図に従い、ここではこういう理由でこの方向から、こういう色を使って、ここに光を当てたいのだということが、お互いに理解できていれば、会館の照明係の人々もより効果的な方法を見つけてもくれますし、努力のしようもあるというものです。

仕込みについて、その技術的なことを書き始めると、具体的にさまざまなケースを考えて触れなければならなくなりますし、大変な量になってしまいますので、つとめて原則的なことを少しだけ触れることにします。

仕込み作業の手順

劇場に着いてからの通常の照明の仕込み作業を簡単に記してみますと、次のようになります。

①器材の搬入、準備
②「仕込み図」に従って所定位置への設置
③配線、及び結線
④カラーフィルターなどの装着
⑤点灯点検
⑥安全点検

照明だけで考えればこれで仕込み作業は終るわけです。書いてしまえば簡単なようですが、その中に含まれる個々の作業の一つ一つが照明プランに従って、芝居のより効果的な成果に向かって作用しなければ何の意味もありません。

先に進む前に他の部門、大道具や小道具などの仕込みと合せて、仕込みの進行を見ますと、おおよそ次のようになります。

仕込み作業の進行例

時間経過

照明	大道具他
器材搬入 バトンなど吊り込み場所の確認 器材の準備	道具搬入 舞台床面の位置決め （地ガスリなどの設置）
〈吊り込み開始〉 舞台床面上部の仕込み （サスバトンなどへの吊り込み） 〈吊り込み完了〉	照明の吊り込みの間にできる作業を進める。
舞台床面以外の場所への仕込み （シーリング、フロント、ギャラリーなどへの仕込み）	大道具飾り込み 〈道具できあがり〉
サスバトンの高さなどを決める ステージまわりの仕込み	文字、袖幕など空間設定 小道具数の位置決め
全ての回路をチェックする	

〈仕込み完了〉

要は一つしかない劇場空間を程よく合理的に、いろいろな部門の作業がうまく流れていくように考えて決められていきます。実際、限られた空間で作業が混乱しないように、しかもむだな時間のできないように予定表を作成する作業は、それぞれのパートの所要時間などの見通しを含めて全体の作業に精通していなければ、なかなかできるものではありません。舞台監督の腕の見せどころでもあるわけです。

学校演劇の場合は、各パート別とはいっても分業化されているわけではないでしょうから、事故に対する注意さえ払えば現場で話合いながらということも可能なわけで、みんなで協力しながら進めるようにして下さい。

安全性を心がける

仕込み作業は結局のところ「設置、結線、点灯」であり、それは仕込み図の実際化ですから、指定に従いながら進められますが、そのそれぞれの技術的作業手順は器材や設置場所によって異なってきます。

一般的には一連の作業に最も大切なことは、必要に応じて「確実に、安全に」ということだと思います。必要に応じてとはプランに従ってということですが、たとえば灯具は必要なものが必要な場所につとめて自由に設置できるというのが理想的なわけですが、現実にはさまざまな制約がありますので、その制約をどう克服しながら作業を進めるかは現場でのオペレーターの大きな裁量でもあるわけです。

「確実性」と「安全性」とは常に同居していて、ほぼ同意語に近いものだと思います。安全な作業こそ私たちを含めて、初心者には特に心してもらいたいことです。安全の確保は作業の確実さであり、合理性の追及でもあるわけです。

安全性にはいくつかの側面があると思いますが、一つには電気的な面での安全性が考えられ、一つは落下防止のような物理的な側面での安全性が考えられます。そして、この二つには作業中の作業員に対する配慮と、観客や俳優など第三者への配慮とが考えられなければなりません。

初歩的な電気についての知識は欠くことができませんから、身につけるようにしなければなりませんし、器材や灯具についての扱い方やそれぞれの部分や構造といったものを、原理的によく知る必要があります。

起こしやすいミスについて

初歩的なことでいえば、一次側から末端灯具にいたるまでさまざまなケースが考えられますが、その中から犯しやすいミスについて述べてみます。

●容量オーバー（過負荷）は現場でときとして犯してしまうミスです。回路の容量はもちろんですが、コンセントの定格容量は何A（アンペア）までのものか、接続のために使っているコードの容量は？　それに使われているコネクターの容量は？　といったことを少し注意深く考えればトラブルの大部分は防ぐことができます。

●コネクターのこわれたものや、接点のゆるみ、コードの被覆の傷んだものなどは、電気の流れを妨げたり、流失（漏電）といったような結果をまねきます。注意深く点検をすれば一目で発見できることが大部分ですから気をつけるようにしてください。

●仕込んだ灯具類の落下防止や、ステージなどで人物や道具類などの移動があるような場所での、移動の安全と灯具の安全といったものも充分注意が必要です。

事故やトラブルには調べてみれば、なんらかの理由があります。知識や経験で未然に防ぐようにしなければなりません。

ここで注意したいことは、電気的安全性はある程度知識やプランの打ち合わせの段階で防ぐことができますが、灯具の落下防止などの物理的な安全性は現場で解決しなければなりません。ただ、仕込み作業の段階では、吊り位置や灯具の向きなど最終的に決ったわけではありませんから、変更や移動、修正に対しても対応できるような配慮が必要なことはいうまでもありません。あまりにもしっかりと止め過ぎたネジとか、しっかりと固定されてしまったコードや灯具は次の作業を妨げます。仕込みはまだ準備中ですから、最終的な確認とは多少異なった余裕をもたせたいものです。

学校の体育館や講堂などのような常設の照明設備のない所での仕込みには、調光装置の設置や、その電源の確保、灯具までの長い距離の配線といった非常に大変な作業が加わってきます。安全の確認には一層の留意が必要

news

大庭三郎氏、勲四等旭日小綬章授賞

●日本照明家協会会長として活躍しておられる大庭三限氏（大庭照明研究所）が、昨年の紫綬褒章に続いて勲四等旭日小綬章を授賞されました。氏は『屋根の上のヴァイオリン弾き』など数多くの名作舞台の照明を手掛けてこられました。また、日本人の色彩感情価値について長年にわたって調査されてきた結果をまとめられた『色彩の世界』（未来社刊、1500円）も出版されています。これは、舞台照明の表現を考える上でも、大変参考になる著作です。

芸能功労者表彰に若尾正也氏

●若尾正也氏（若尾綜合舞台研究所）が、日本芸能実演家団体協議会（芸団協、中村歌右衛門会長）の「昭和61年芸能功労者表彰」をうけられました。これは、戦後日本の中部地方における文化芸能の基礎を築いた功績が高く評価されたものです。また、氏は若尾正也照明研究所を創設し、舞踊、音楽などにその活動分野を広げ、多くの後継者を養成してこられました。

日本照明家協会賞新人賞

●前号でお知らせしました60年度日本照明家協会賞では、舞台部門の新人賞に原田保氏と井上嘉一郎氏（東京舞台照明大阪支社）が選ばれています。原田氏は沢田研二・コンサートツアー『架空オペラ』の舞台照明の成果が、また井上氏は『ナニワ・エキスプレス』コンサートツアー公演の照明技術の成果が、それぞれ高く評価されたものです。原田氏は映画『Wの悲劇』の劇中劇の舞台照明をプランニングしておられます。

です。

サス合わせ

「設置、結線、点灯」が終われば、それぞれの回路チェックをおこないます。これは前回で触れた回路の「名称づけ」により、選別されながら「組表」に従って調光器に接続されていきます。

大道具、小道具もほぼ飾り終わり、文字や袖幕なども決められ、サスバトンなども所定の高さにおさまれば、いよいよ「サス合わせ」に入ります。これは各々灯具のシュートであり、光の行き先を定める作業です。上部のものは脚立やタワーなどに登って、灯具一台一台の光束の大きさを調節し光の当るべき場所へと定めます。「サス合わせ」はシーリング、フロント、ギャラリー、ステージと全てにわたっておこなわれます。何回も公演を重ねてきた芝居の場合はともかく、最初の舞台稽古のためにおこなわれる「サス合わせ」は、何箇所もの作業を同時に進めることは不可能ですから、一つ一つサスを合せていくことになります。従って時間もかかります。また、その灯具がベースになる明りをつくるものであったり、キィーになる明りをつくるものであったりというように、使用される目的がそれぞれ異なり、しかも複数の目的を持っている場合があったりしますので、どの部分から先に合せていくかはプランナー（デザイナー）の計算と思いによって違ってきます。端から順々に合せていくとばかりはいきません。こうしたことも稽古場での準備段階からの打ち合わせである程度はっきりしてきますので、よく理解した上で作業手順を工夫するようにします。

灯具の操作

ここでの作業の中心は、灯具の操作になります。

灯具の原理だけを簡単に見れば、光源(電球)があって、レンズがあって、光源またはレンズを移動することによって、光束を有効に調整するだけのものといえます。そのために覆いをつけたり、電球もいろいろな特性を持ったものが工夫されてきますし、使用目的にそって、レンズもまた複数使われたりというようになるわけです。

外形や仕様もまたニーズに合せて次々と工夫されてきますが、その調整方法や手段が変わっても、シュート作業は結局光束を一定に調整するということにつきます。

特殊な器材はともかくとして、通常使われているレンズスポットは、操作性はそう複雑なものではありません。調整や固定のための方法やネジの取り付け場所が多少異なっているといったことが大部分です。

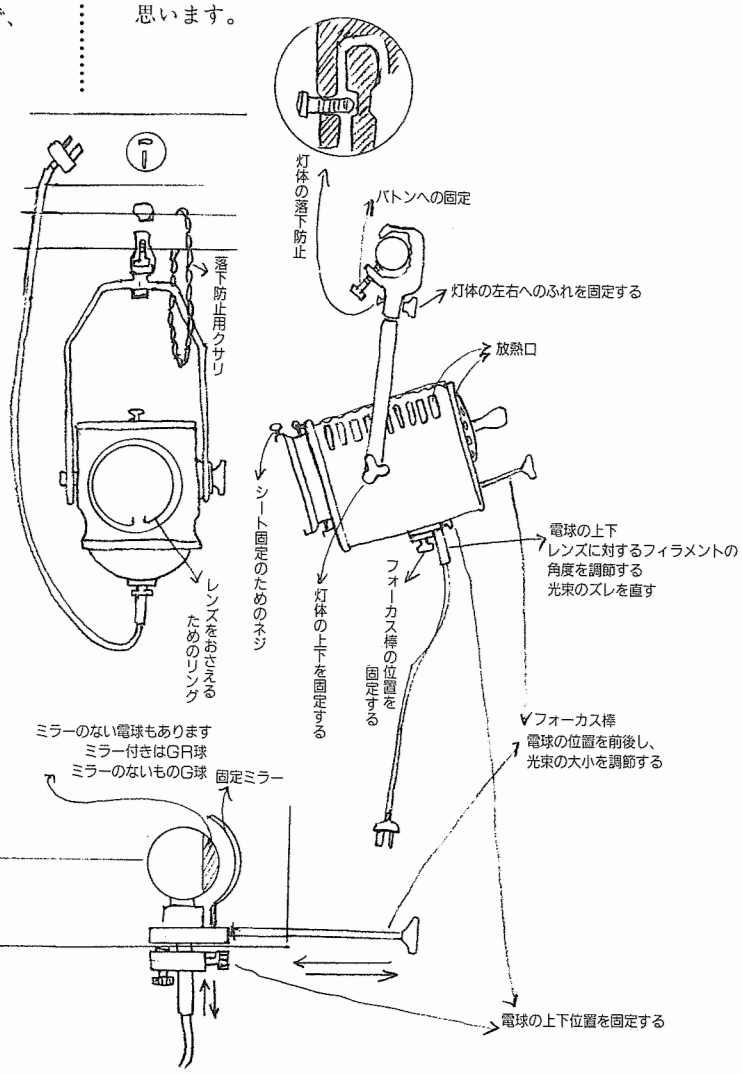
光束にムラがあったり、ゆがんでいたり、二重になったり、とんでもないところにもう一つの光の輪ができてしまったりという時の調整は、もっとも原理に忠実に考えればよいわけで、いろんな灯具があってもわざわざ扱いをむずかしくするために設計されているわけではありませんから、臆することなく動かしてみることです。

写真の方が良いのですが、わかりやすいCEC型スポットライトの図を使って、スポットライトの扱い方について簡単に触れておきます。

一連の作業を終えれば、「明り合わせ」に入ります。仕込み作業それ自体は極めて技術的に処理されることが多いのですが、舞台稽古を通じて公演中の照明操作の実行に際しては、合せてオペレーターの感性も大きく要求されてきます。

次回では実行段階も含めて、そこまで触れてみたいと思います。

灯具の構造と操作方法
（CEC型500Wの場合）

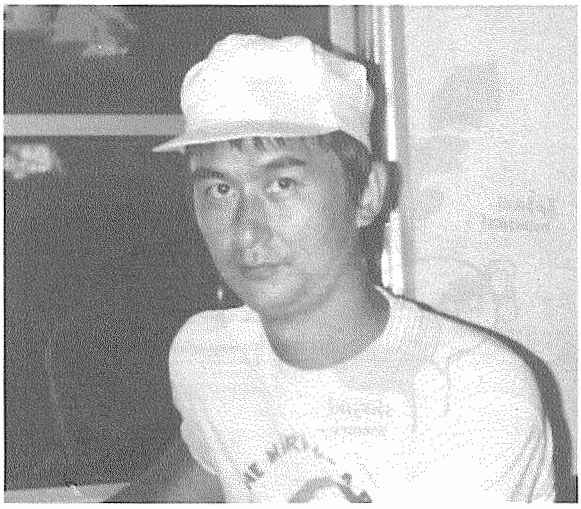


作業に適した服装

活躍する照明家に

きく

山本良則（東京舞台照明）



研修

最初は小さな劇団で大道具など裏の仕事をいろいろとやっていましたが、その後照明の仕事を本格的にやりたくて東京舞台照明に入りました。

その頃は会社に入ると、はじめの２週間ほどは研修のようなかたちでNHKや俳優座劇場など実際の仕事の現場に行き、見学させてもらっていました。この研修は、ほかの照明会社に入った新人もみんな一緒におこなわれ、これから照明をやっていこうという人間が数十人も固まって動いていたわけです。

俳優座劇場での研修では、簡単な道具を飾った舞台に先輩たちが明りをつくり、前明りとか、サスの明りとかを説明してもらい、それを新人たちは客席に座って聞いたりしていました。

そのほかに、新人たちがみんなそろって健保会館に行き、専門のお医者さんから健康管理についての話を聞いたりもしました。この仕事は夜が遅くて、朝も早く、生活が不規則になるというので、健康管理についての話が研修の中に組み込まれたんでしょうね。今思うと随分優雅に教えてくれていたんだなと思います。

現場での仕事

研修が終わると新人はそれぞれの会社に戻り、テレビ部門や舞台部門にとわかれていくわけですが、当時読売ランドにアークピンがありましたので、ぼくの会社では新人にその扱い方を早く覚えさせようということで、順番に新人を送り込んでいました。

ぼくがはじめて舞台についたのは『どん底』という芝居でしたが、その時は本当に何が何だかわからなかったですね。ただ、ステージの上をウロチョロしていただけで、何か言われてもどういうことなのかわからない、聞きにいくと怒られるといった具合です。

で、まず物の名称を覚えるのが先決だと思い、とにかくスポットをはじめ舞台で使う物の名前を覚えました。扱い方はそれからですね。

ぼくの場合は、今は何も知らないから怒鳴られるのはしかたない、一応覚えるまではがんばろうという気持ちがあったから、けっこう怒られたけどあまり焦るということもありませんでした。ただ現場では言い方がどうしてもきつくなりますから、あこがれとかカッコいい仕事だなといった夢を持っていると幻滅することはあるでしょうね。特に、学校を出たばかりでこの世界に入ったら、自分の時間なんてどこかに飛んじゃうし、つらい事はしょっちゅうあるので大変だと思います。それを乗り越えるには、まず広い考えを持つということでしょうね。学生時代には照明の勉強をするよりも、いろいろな本を読んで、幅広く勉強をしなさいということをいろいろな人が言われるけれど、それは見方や考え方を狭くしないで広い考えを持つのに大事なことだからなんです。

芝居の明り

ぼくは芝居が好きで主に芝居の明りをやっているわけですけど、芝居の明りというのは舞台にいる人間がちゃんと見えて、どういう役をやっているのかということがしっかり伝わり、観客がいい芝居だったと満足してくれる。それが大事だと思っています。照明で何かを主張するということではなく、邪魔にならない明りが大切だといってもいいと思います。

まだ明りについてはわからないことばかりですけど、芝居が終わってお客さんがゾロゾロ帰りながら、「いい役者だったね」とか「ああ、よかった」といった会話を聞くと、みんな役者や芝居を見にきていたんだなと実感します。自分で切符を買って見にいく時も、自分も裏方の仕事をしていますから当然明りも見に行くつもりだけど、やっぱり舞台に出ている人、いい役者を見たい、そういう気持ちが強いわけです。自分がひいきにして切符を買ったんだとか、この人の芝居が好きだから見にきたんだといったようにね。芝居の明りをつくる時も、いい芝居を見て欲しい、役者の魅力を見てほしいという気持ちが大切だと思います。

仕込み図を書く

最近はプランナーが仕込み図を書きますが、ぼくの会社の社長の照明プランのオペレーターをした時は、装置図に場面、場面のイメージを色鉛筆で描いたものが渡されました。これを仕込み図に書きおこすわけですが、最初の時はその色鉛筆に描かれたままをこまかく書きおこしていったら地明りの色だけで５～６色になり、困ってしまい、先輩に相談して調整したことがあります。でもこれは、とてもいい勉強になりました。たとえば、夕陽が差し込むというのを下手側から色鉛筆で描いてあった場合、それをハイスタンドにするかロースタンドにするかはこちらの判断になるわけです。この劇場にはギャラリーがあるからその奥からやってみようといろいろとスポットの置き方を工夫し、装置図に描かれたイメージをどう舞台につくるかを考えます。つまり、自分で考える余地が残されているんですね。こういった時の経験が、自分でプランをつくったりする時の糧になってくるんだと思います。

稽古場の光と影

●（つじ ゆみこ）女優。東京演劇アンサンブル所属。『かもめ』のニーナ役や『男は男だ』のペクビック役など、数多くの舞台で精力的に活躍。なかでも『セチュアンの善人』のシェン・テ役の演技は高く評価され、56年度の紀伊国屋演劇賞を授賞した。

私たち東京演劇アンサンブルは5年前に、現在の稽古場に引っ越してきた。映画などを撮るスタジオを借りたもので、いってみれば、大きな長方形の倉庫をひとつみつけたという感じである。人工的な装飾のまったく無いガランとした、むしろほこりっぽいこのスペースは、物理的にも精神的にもたくさんのワクをとっぱらって痛快ですらあった。

既成の劇場機構にとらわれないオープン・スペースでの自分たちの演劇行為の場を作ることへの期待のなかで、夏の真っ盛りの頃に、劇団員総出で稽古場の床を張ったことを思い出す。

私たちはこの空間を「ブレヒトの芝居小屋」と名づけた。アンサンブルの31年のコンティニュイティのなかでのブレヒトとの出逢いは、時代や状況の中で読みかえられ、その度毎に、未知なるものへの誘惑となり、想像力の動機と変化を創ってきたからである。

都市化の真ッ只中での「ブレヒトの芝居小屋」の空間は、世界と、状況と対立した、人間の場としての内実を探しつづけていくのだろう。

さて前置きが長くなったが、ここでもうずい分たくさんの芝居を演った。チェホフの『かもめ』、宮沢賢治の『グスコー・ブドリの伝記』『銀河鉄道の夜』、小沢正の『目をさませトラゴロウ』、W・キブスンの『奇蹟の人』、坂口安吾の『桜の森の満開の下』、ウェスカーの『かれら自身の黄金の都市』、そしてブレヒトの『セチュアンの善人』『男は男だ』『都会のジャングル』『ガリレイの生涯』『パリ・コミューン』……

読み稽古を重ね、スタッフ会議を開き、自分たちの個別の観客へのお誘いの手紙を書き、ポスター貼りやチラシ撒きに出かけて行き、パンフレットの為の編集会議を持ち――あれこれと、一つの芝居が生まれる過程のなかで、ひとつずつ、少しずつ、あるいは突然に、あるいはうす皮をはぐように、ディテールが深まっていく。

装置プランが検討されて「よし、これでいってみよう！」と最終プランが練りあげられる頃、稽古の方も読み稽古から立ち稽古へと移行していく。立ちの初日に、装置プランに沿って道具が組めるのも自前の小屋をもつことの倖せのひとつといえる。立ち稽古のなかで、装置プランが変化していくことも勿論ある。

劇団のひとりひとりは、大体どこかに顔を出し、手も出し、口も出して、ほとんど一日中稽古場にいる生活をするようになる。皆、よく働き、よく食べ、よくしゃべり、よく呑む。そういう訳で、この空間では皆が光であり影である。

今年の秋の公演は、ウェスカーの『かれら自身の黄金の都市』であった。アンサンブルは1975年にこの作品を初演しているので再演になるわけだが、この10年の間の、又、ウェスカーがこの作品を発表してからは20年という時の流れの間に、世界はさまざまの変化をとげた。工業化、合理化の進む社会機構のなかで、人間の地点は見失なわれ、人間の未来はさきぼそりしていく。

アンドルー・コバムとその仲間たちは、科学によって荒廃させられた人間の精神の再生をめざす。

10年前の初演の時には見えなかったものが、アンサンブルの内的な外的な状況のなかで変化していき、生き方として提示されていく。アンサンブルのコンティニュイティのなかで光をあててきた地点から、新しい地点が確かな事実として創り出され、さまざまの影（矛盾）を生み出して新たな空間を創り出す。人間の地点への再生、回復の新しい精神を探しつづける空間的な感覚の場として「ブレヒトの芝居小屋」は未知なるものへ向う。

私の感受性を疑え、そしてとぎすませ、と私の内なる声が聞こえてくる。刻々に変化していく世界を、私のなかでつかまえられない限り私の未来はないのだから。

「人間は人間の未来である」というサルトルの言葉が背後から聞こえてくる――。

照明と遊ぶ楽しさ

小林裕

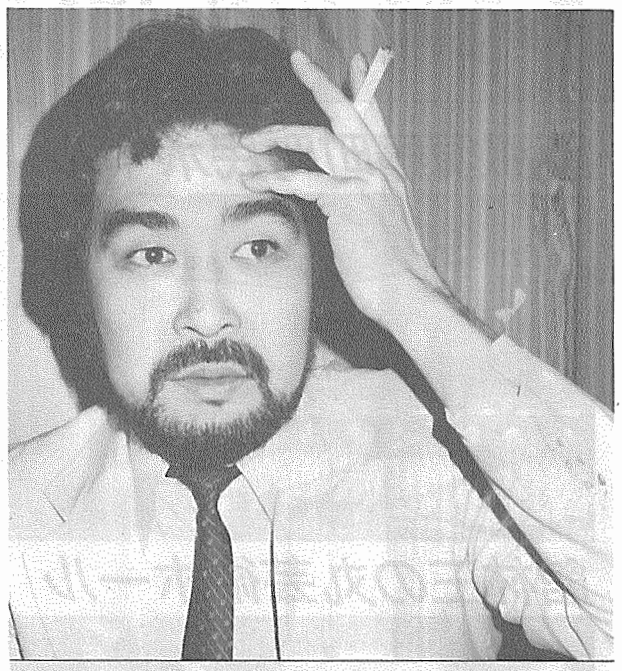
舞台装置の仕込みもあらかた終わり、不意に劇場内が暗くなる。照明のシュートが始まる。私はこの瞬間が大好きだ。思わぬアングルから思わぬ色が走り、光と闇のはしゃぎが生まれる。リズムボックスで軽快なリズムを流してやればそれだけでパフォーマンスとして成立する。プランナーから渡された吊り込みの図面と光の走りを見比べながら、プランナーの発想や使用個所を推理するのも楽しい。

公演が始まってからも、開演前に〝あたり〟のチェックをする瞬間もこたえられない楽しみだ。不当配列的に走る光線が、次々と舞台装置の一部を捉えるのを眺めていると、思わぬ面白みを発見して取り入れたりもする。演出と俳優の仕事もそうだが、照明の作業も初日から千秋楽まで休む間もない発見の連続だ。舞台稽古から初日迄の時間が少ない日本の演劇条件では、楽日まで気を緩める暇がない。「あの演出家は照明が好きだねえ(!?)」、少々批難めいた語調でスタッフがヒソヒソ話しをしている。私はニンマリ誇らし気だ。しかも、映画の「E・T」のUFOのキラキラが大好きな人間ときているからスタッフの言い分も当っている訳だ。

演出をやるようになった当初、各部署のプランナーの皆さんと打ち合わせをすると必らず言われた言葉がある——「そんなことをやったら同業者に笑われちゃうよ！……」。今はそうでもなくなったが、スタッフの作業が俳優の作業の補助だとの認識が強かった為だろう。第一線で活躍している俳優さんのレベルが全て高いわけではない日本の公演状況では、前述の精神が、無残なまま俳優さんを舞台に曝すという場面も往々にある。その瞬間、その舞台は死んでいるわけだ。嬉しいことに、これまで出会った照明家の方々は皆さんエネルギッシュで、共に解決してきた仕事の一つひとつが増々私を照明大好き人間にしてくれた。

照明と音響、この二つは私の大事な柱なのです。戯曲の世界観を明瞭に観せる為には、構成の細分化によって裏打ちされた飛躍が必要だが、それを全て俳優さんの表現に寄せるとデコラティヴになってしまう。俳優さんが持続する、ストーリーとしての時間に、突如として世界観を突出させるには照明の働きが大いに必要だ。サスで抜くとかそういう事ではない、映画のカメラワーク的表現を照明がするのです。プランナーと２人でテストを繰り返しながらワイワイやるのは楽しい時間です。アップ・パン、ロング……進行するストーリーからスッと世界観を採りだして観客に染みらせて、そうっとストーリーに戻す……。

成功した想い出のひとつに「ショート・アイズ」という作品がある。もう５・６年前になるが、文学座のアトリエ公演だった。この戯曲はアメリカの刑務所内部の暴露告発モノだったが、人種差別や現代アメリカの暗部を抉りだした台本です。所内では多数派が力を持っており、一般社会とは逆に、数の少ない白人がビクビク生きている。そこへ、若い白人の青年が拘留されてくる。少数派の白人の囚人は大いに喜ぶが、その青年の容疑が〝幼女強姦〟と知るや態度を一変させる。犯罪者たちの中でも憎悪の対象である犯罪、その罪を犯した青年を庇うと自分の立場が危うくなる。他の有色人種の囚人たちもイラだちの吐け口としてその青年を苛める。看守にそそのかされて連中はその青年をリンチ殺害することに決める。ざっとこのようなストーリーだが、アメリカではかなり評判になった作品で、その表現はクールであり、刑務所内の実情をありのまま露呈する主旨の作品だったと聞いた。



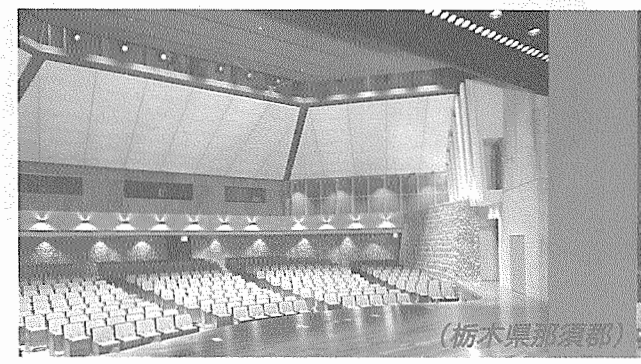
●（こばやし ゆたか）演出家。文学座所属。新進気鋭の演出家として優れた力量を発揮し、『ショート・アイズ』『裸足で散歩』の演出ではＳ61年度芸術選奨文部大臣賞新人賞を授賞。主な演出作品に『モヴィディックリハーサル』『本牧メルヘンシリーズ』などがある。

社会の矛盾や人間の愚しさを告発するこの戯曲の中に、もっと、悲しい程の人間の性と、それに抗してゆこうとする微かな意志を盛り込みたくて大いに悩んでいた。そのひとつのシーンとして、青年を殺害する場面をどう見せるか？　プランナーの金君と何度も討議を繰り返した。かなり残酷なシーンです。そうして選んだ結論はこうでした。二幕が開いたらドンドン深い夕景にしてゆこう。殺しの瞬間に白光の一瞬を造る。そのタイミングと白光の瞬間の長さは脈拍の一拍。タイミングは観客の〝ドキ！〟と合わせる。殺害シーンに参加する俳優さん達は、ピクニックを楽しんでいるようにリラックスして殺害し、し終った瞬間から急激にケモノのような感情に持ってゆく。そして、観客の〝ドキ！〟が——つまり白光が薄れ始めたら、ピアノだけの透明なメロディーの音楽を流す。金君、そして音響の深川さんを混えた打ち合わせで出た結論は見事に成功したように思います。これはカメラワークで言えば一瞬の俯瞰で、いたずらに残酷になるだけのシーンから〝神が人間の愚しさを泣いている〟とでも言いたいようなシーンにする事が出来た。

観客の感性が豊かになったこの頃、照明は大変な仕事をするようだ。今、照明に遊んでもらうのが私は楽しい。

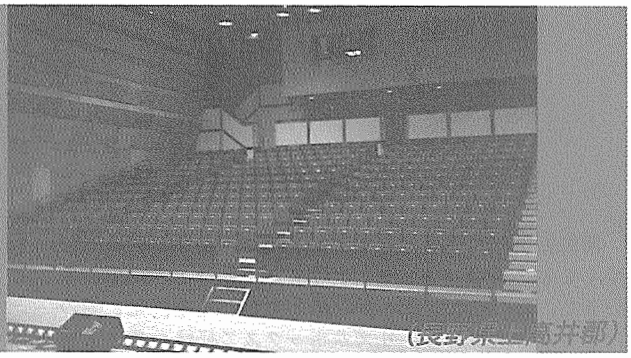
あなたの街にMARUMOの光 3

西那須野町町民ホール



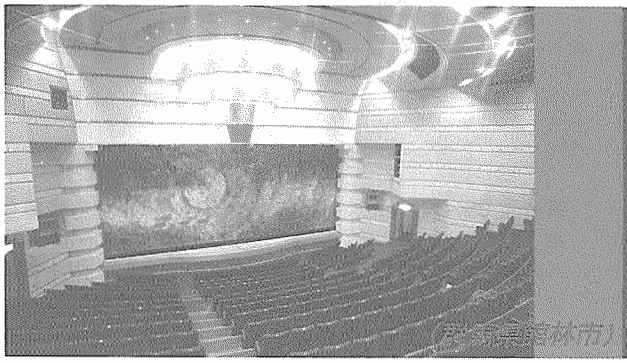
（栃木県那須郡）

小布施勤労青少年ホーム



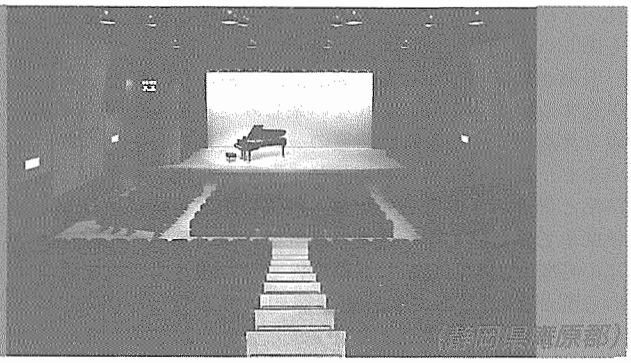
（長野県上高井郡）

館林三の丸芸術ホール



（群馬県館林市）

由比町町民センター



（静岡県蒲原郡）

「西那須野町町民ホール」が誕生した西那須野町は、明治時代に入り三島通庸によって始められた那須野が原開拓の歴史の跡が数多く見られるところ。なかでも桜の名所として知られる烏が森公園は、印南丈作らに率いられた開拓団体、那須開墾社が開いた烏が森農場の跡で、いわば西那須野町発祥の原点。現在も当時の農場事務所がそのままの姿で残され開拓に取り組んだ先人の業績を永久に語り継いでいこうとする町民の思いが伝わってきます。**「小布施勤労青少年ホーム」**のある小布施町は長野県の北東部に位置し、千曲川東岸の諸集落を結ぶ谷街道の要地として栄えてきました。また、地元産の菜種油、綿などの市場町としても古くから知られ、現在でも毎年1月14、15日には〝安市〟と呼ばれる市がたち、遠近からの人出でにぎわいます。また、この地の豪商高井鴻山は葛飾北斎の芸術のよき理解者、庇護者としても著名で、晩年二度にわたりここを訪れた北斎の遺作も数多く残っています。なかでも福島正則の廟所のある岩松院では、鴻山と北斎との合作による鳳凰天井図を見ることができます。**「館林三の丸芸術ホール」**は城下町として栄えた館林市のホールに相応しい名称。現在は城跡が残るだけですが、市民にとって館林城は心の中のシンボルとしてそびえているようです。築城の際に〝老狐が尾をひいておしえた〟という伝説から尾曳城とも呼ばれており、最後の城主秋元氏の家臣の家に生まれ、少年時代をここで過した田山花袋によって書かれた作品にもこの城跡がたびたび登場します。また、つつじの名所として知られる〝つつじが岡公園〟やぶんぶく茶釜の茂林寺など、名所、旧跡の多い、歴史の豊かさを感じさせる街です。駿河湾に面した由比町にオープンしたのが**「由比町町民センター」**。由比町は由比正雪の生地でもあり、交通の要所として、また宿場町として栄えてきました。夏になると海水浴場としてにぎわい、蕪村の句に〝みじか夜や　あしあと浅き　由比の浜〟などもあるように、感興を誘う景勝の地でもあります。それぞれ異なった歴史と、文化を持つ街に誕生した公共ホール。今回紹介したホールは収容人員400～500人の規模で、住民が身近かに活用していけるようにというコンセプトを持った新しいホールです。街の文化を自分たちの手でという意欲的な人々の声に応えてMARUMOの光が活躍します。

●この他『富山県高岡文化センター』『石垣市民会館』『梅田コマスタジアム』の施工パンフレットが用意してあります。
ご希望の方 は本社営業部にご請求下さい。

＊あなたの身近かに、新築・改修を計画中の市民会館、学校の講堂などについての情報がありましたら、編集部までお知らせ下さい。

●発行――――――丸茂電機株式会社
〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(252)0321(代)
●編集責任者――――――井上利彦
編集協力――――――小川昇舞台総合研究室　レクラム社
●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●このニュースは弊店からお届けします。